SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中学生を対象とした「聞くこと」「話すこと」に関する英語モジュール学習の実践的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅田, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010214

中学生を対象とした「聞くこと」「話すこと」に関する英語モジュール学習の実践的研究

梅田　晃

An Action Research Study of English Module learning about Listening and Speaking for Junior High school students

Akira UMEDA

1 問題の所在と本研究の目的

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え，新たな英語教育を展開するために，文部科学省は平成25年12月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し，国は小・中・高を通じ，先進的な取組や教員研修を実施してきた。しかし，高校3年生を対象とした平成26年度「英語教育改善のための英語力調査」の結果，英語4技能全てにおいて課題があり，また「英語教育実施状況調査」から，中学生の英語力に関しても改善が見られていないことが明らかとなった（文部科学省，2015,「生徒の英語力向上推進プラン」)。

このような背景の下，国は平成27年6月に「生徒の英語力向上推進プラン」発表した。この施策における具体的な取組は①都道府県ごとの目標「GOAL2020」の設定及び公表②都道府県別の英語力の結果公表③中3生を対象とした全国テストの実施④中・高・大での英語力評価及び入学者選抜における英語の4技能を測定する民間の資格・検定試験の活用促進である。中学生に対しては，平成29年度までに，50%以上の生徒が，卒業段階において英検3級程度の学力を身に付けることが求められた。

同プランが公表されたのと時を同じくして，静岡県K市A中学校区では，区民から「A中学校の生徒に英語力をつけてもらいたい」との要望が，地区集会の場で挙げられた。同会には，市長，市教育委員会学校教育課長，並びに静岡大学山﨑保寿教授が出席しており，この関係から現職中学校英語科教員である筆者がアクションリサーチとして，A中学校生徒の英語力向上のための取組に着手することになった。しかしながら，英語モジュール学習を実践できるのが週の1回15分という制約から，生徒の英語力全般を向上させることは極めて困難が予想されたため，英語4技能の内，「聞くこと」「話すこと」に関する技能に焦点化し，指導に当たることとした。

以上の動向を踏まえ，中学生に「英検3級程度の英語対話力」を身につけさせるための教育プログラムを作成することが，本研究の目的である。これを遂行するため，A中学校において，2年生（現3年生）36名を対象にした英語モジュール学習（15分間）の実践的研究を行った。その際，英語モジュール学習に関する教育方法や教育内容を開発し，英語教育プログラムとして提案する。

なお，中学校の教育課程においてモジュール学習を日課の中に設定することは，諸活動からの制約面や教科担任制の面から考えると困難であると考えられるため，本稿は通常の英語授業とは別に設けたモジュール学習の実践だけでなく，モジュール学習の実践の中で開発した教育方法お

よび教育内容を，英語教育プログラムの１つの型として作り上げ，それを通常の英語授業の中で「帯活動」として取り入れることを提案するものである。この場合，A 中学校のような小規模校だけでなく，すべての中学校において取り組むことができる。なお，モジュールとは「大きなまとまりの構成要素の一つ」を意味し，通常の英語授業における帯活動もモジュール学習として捉えることができる。

２ 本研究の課題と解明のための手順

(１) 国及び静岡県の英語教育の動向を捉えるとともに，英語教育研究推進校等の視察により中学校英語教育の問題点を整理する。

県内外において，先進的に英語教育を行っている中学校等の外国語授業を参観し，分析・考察することで，英語モジュール学習の教育方法及び教育内容の示唆を得る。また，第二言語習得理論について整理し，これまで日本で行われてきた英語教育を振り返ると共に，2000 年以降日本で主流になってきた内容中心教授法や課題遂行型言語教育に代表される「コミュニカティブ・アプローチ」，さらに新しい教育方法である「フォーカス・オン・フォーム」や「CLIL」の要点をまとめると共に，それらをいかに中学校英語教育に導入していくかを検討する。なお，本稿での紹介は紙面の制約から省略する。

(２) A 中学校における生徒の実態把握を行う。

A 中学校における授業参観，テスト分析，質問紙調査を通し，英語学習に対する生徒の意識および学習状況を把握し，英語モジュール学習に取り入れる教育方法と教育内容についての見通しをもつ。なお，本稿での紹介は紙面の制約から省略する。

(３) 英語モジュール学習の計画，実施，検証，改善，成果創出とプログラムの提案を行う

中学生における英語の対話力を向上するための取組を，計三期にわたる英語モジュール学習を通じながら，各々の教育方法と教育内容を PDCA サイクルに基づいて実施し，その成果を検証することで，対話力を高めるための効果的な教育プログラムを提案する。

(４) カリキュラム・マネジメントを意識した，地域人材を活用する中学生英語力向上のための取組の支援を行う。

A 中学校において実践した英語モジュール学習の波及効果についても紹介するとともに，生徒の英語力を保証する組織体制の在り方について見解を述べる。なお，本稿での紹介は紙面の制約から省略する。

(５) 中学校卒業段階で生徒が英検 3 級程度の英語力を身につけるためには，小学校外国語活動がどうあるべきかを考察する。

「外国語青年招致事業を活用した西伊豆町外国語教育プログラムの研究」への参画を通し，小学校外国語活動の現状を把握するとともに，小学校外国語活動と中学校外国語教育の接続について考察する。なお，本稿での紹介は紙面の制約から省略する。

３ 英語モジュール学習の実践に向けて

英語モジュール学習の構成，教育方法，教育内容を決定するため，約 2 ヶ月計 9 回にわたって，生徒の学習の様子を観察した。そこから明らかになったことは，生徒たちの学習に向かう姿勢は

必ずしも良い状態とはいえないということである。授業開始時間が守られておらず，休み時間との切り替えをすぐにできなかったり，授業が開始しても話を聞かずにうわの空の生徒や，別のことをしていたりする生徒が何名か見られた。

一方で，学習活動が軌道に乗るとグループ活動で班員と意欲的にかかわることができ，会話活動やライティング活動に意欲的に参加できる生徒が多いという面も見られた。

また，第3回定期テスト（平成27年11月19日実施）から，英語の学習に遅れが見られる生徒が36名中3割程度いることが明らかとなった。このような中，英語モジュール学習開始の約1ヵ月前である平成27年12月11日に，生徒の英語学習に対する意識を調査するため，第1回質問紙調査を実施した。対象は英語モジュール学習を実施する第2学年36名であり，有効回答率は100%であった（5段階法で実施）。この結果，「英語を使えるようになりたい」「英語の勉強は大切である」「進路や将来の仕事に役に立つ」と，英語の意義に肯定的な考えを抱いている生徒が8割以上いる一方で，「英語の勉強が好きだ」「英語を生かして将来仕事をしたい」と答える生徒は4割程度以下であった。「平成15年度 小・中学校教育課程実施状況調査」（国立教育政策研究所,2003）によると，5割強の中学2年生が「英語学習が好きである」と答えている。このことから，生徒の英語に対するあこがれや学びたい気持ちは高いものの，実際には英語学習が思うようにうまくいかず，困難を抱えている者が多いことが分かる。

また，それぞれの英語技能への意欲に関しては，「外国の人の話を理解したい」「メディアからの英語を理解したい」などの「聞くこと」に関すること，また，「外国の人と気軽におしゃべりしたい」という「話すこと」に関することに対して，向上意欲が高いことが分かった。

このため，筆者がまず取り組むべきことは，生徒たちの英語に対するバリヤーを低くすることであると捉えた。そこで，Edward. L. Deci（1999）が提唱する，動機づけを高めるための「3つの心理的欲求」である「自律性の欲求」「有能さの欲求」「関係性の欲求」を満たすための学習活動を，英語モジュール学習に取り入れることにした。「自律性の欲求」は自らが進んで学びたいと思えることである。学習者である生徒が，自らの責任で，純粋に楽しめ，ワクワクするような活動を展開する必要がある。「有能さの欲求」は「自分はやればできる」「上達している」と感じられる状態である。自らの成長を感じられれば，それが自尊感情の高揚につながり，さらに学びたいという気持ちが生まれる。「関係性の欲求」は，友達と一緒に学びたい，先生や友達に助けてもらえるという気持ちや安心感である。

自律性の欲求を満たすために，「課題遂行型言語教育（Task Based Language Teaching）」（以下，TBLT），有能性の欲求を満たすために「1年時からの復習」，関係性の欲求を満たすために「協働学習（アクティブラーニング）」の3つを軸に，学習をデザインすることにした。また，発達障害などの理由から、英語に限らず学習すること自体に困難を抱えている生徒を支援するために，モジュール学習をユニバーサルデザイン化することも同時に意識した。さらに，英語学習に対して消極的な傾向にある生徒の状況を考え，「苦手を克服するよりも得意をさらに伸ばす」「生徒の思いを大切にする」ことを重視し，生徒が質問紙調査の中で明らかにした「聞くこと」「話すこと」に関する技能向上への強い思いを考慮して，最終的なゴールを「英検3級程度の対話力を身に付ける」と設定した。次図は英語モジュール学習の構成概念である。

4 第Ⅰ期英語モジュール学習の実践

内容	時間配分
（1）本日のトピック紹介	30秒
（2）Intake Reading	2分
（3）ターゲット文の確認	1分
（4）1分間対話活動	1分
（5）振り返り①（ペア）	3分
（6）振り返り②（グループ）	5分
（7）本時のまとめ	2分30秒

第Ⅰ期英語モジュール学習の具体的な構成は右表の通りである。まず，15分間の山場となる課題を「1分間対話活動」と設定し，生徒は事前に準備をしない，即興的な英語のやり取りを行うことにした。山場の課題に向かって（1）本時のトピックの確認（2）対話の参考にするためのリーディング活動（Intake Reading）（3）ターゲット文の確認を行う。（4）1分間対話活動の後は，（5）ペアで自分たちの対話を書き出すことで振り返り，（6）ペアで解決できなかった疑問をグループで教え合い，（7）最後に自分の活動の様子を評価する。

この結果，生徒は大変意欲的に英語学習に取り組み，英語に対する大幅な意識改善が見られた。第1回質問紙調査で「英語の勉強が好きか」という質問に対して肯定的な回答をした生徒（4と5の数値を付けた生徒）は16名（44%）であったのに対し，第2回質問紙調査で「英語の朝学習に意欲的に取り組むことができた」という項目に対して肯定的な回答をした生徒は33名（92%）であった。また，観察生徒8名の内，5名において対話力の向上が見られた。対話力に関しては太田他（2008）を参考に，生徒が1分間に発話した回数と使用した語彙数をカウントした。

5 第Ⅱ期英語モジュール学習の実践

内容	時間配分
（1）Today's Topic	1分
（2）Webbing	3分
（3）Group Taking	2分
（4）Description①	**2分**
（5）振り返り（グループ）	3分
（6）Description②	3分
（7）まとめ	1分

第Ⅱ期英語モジュール学習の構成と内容は右表の通りである。第Ⅰ期と同様，「視覚化」「共有化」「焦点化」に基づいたユニバーサルデザインの授業を構成し，スモールステップによって，生徒が学習していけるようにした。15分の山場の課題を「Picture Description」と設定した。"Description"とは描写を意味し，ここでは与えられたトピックの内容を相手に伝えるために，英語で表現する活動を行う。生徒は，山場の課題に向けて，（1）本日のトピックを確認し，（2）Webbingという手法で，トピックに関するイメージを膨らませ，（3）そのイメージをどのように英語で表現したらよいか，グループで話し合う。これにより，英語が苦手な生徒も何とかトピックを描写することができる。（4）Description の後，（5）生徒は自分が実際に話した内容を書き出すことで，振り返りを行い，（6）書いた原稿を見ずに，もう一度同じトピックでDescriptionを行う。1回目よりもスムーズに発話することを心がける。（7）最後にまとめとして，本時の自分の取組を，記述式と5段階法の質問に答えることで振り返る。

この結果，生徒の英語学習に対する意識改善が更に見られた。第3回質問紙調査における「英語の朝学習に意欲的に取り組むことができた」に対する回答平均値は4.5，肯定率は97%であり，ほぼ全員が第Ⅱ期英語モジュール学習に意欲的に参加できたことが分かる。また，第Ⅰ期英語モジュール学習において，対話力の向上が見られなかった観察生徒3名の内2名に，対話力の向上が見られた。これは，生徒の人間関係を考慮した意図的なペアやグループ作りによるところが大きいと考える。

6 第Ⅲ期英語モジュール学習の実践

内容	時間配分
（1）インタラクション	2分
（2）Interview Practice	2分
（3）What（Who） am I？	**7分**
（4）Writing（振り返り）	3分
（5）まとめ	1分

第Ⅲ期英語モジュール学習の構成は右表の通りである。15分間の山場の課題は「What（Who）am I?」と設定した。生徒は互いに異なる絵カードを背中に貼り，自分のカードが何か，友達に質問しながら答えを求めていくという活動である。この活動には様々な疑問文を用いて質問する力と，相手からの質問を理解して適切に応答する力が求められる。よって，「What（Who）am I?」の前段階として，ペアでインタビューの練習を行う。また，絵カードの内容が，動物や有名人，歴史上の人物，アニメキャラクターというように多岐にわたっているため，適切に質問し，情報を得ていっても，カードが何か答えを導くことができないこともある。このため，毎回授業の冒頭に1枚ずつカードを紹介し，教師と生徒とのインタラクションを通し，そのカードに描かれている人物やアニメキャラクター等について理解を深める活動をする。「What（Who）am I?」の後は，生徒は自分が質問したことを書き出すことで振り返り，最後にまとめとして，本時の自分の取組を，記述式と5段階法の質問に答えることで振り返る。

この結果観察生徒３名（Q,R,S）の内，生徒Ｒと生徒Ｓの対話力を量的に伸ばすと共に，生徒Ｑと生徒Ｒの対話力を質的に向上させることができた。また，第Ⅱ期英語モジュール時に比べ，生徒の英語学習に対する意識改善が更に見られた。「英語の朝学習に意欲的に取り組むことができた」という項目に対する回答平均値は 4.8 で，肯定率は 100%であった。

７ 本研究の成果と今後の展望

英語モジュール学習を計３期に分け実施し，その中で内発的動機づけやユニバーサルデザインの理論を基にした教育方法および教育内容を開発し，実践したことにより，生徒の英語学習に対する意識の改善がなされるとともに，英語対話力の向上が見られた。英語モジュール学習開始前に行った第１回質問紙調査と第Ⅲ期モジュール学習後に行った第４回質問紙調査（下表）を比べると，英語学習に対する大きな意識変化が表れている。「英語の勉強が好きだ」と感じていた生徒は 44%から 92%（英語の勉強は楽しいと思った）に，「英語を生かして，将来仕事をしたい」は 28%から 47%に上昇した。また同質問項目に対する否定率は 36%（13 名）から 11%（4 名）に減少した。この事実は，グローバル社会が進む現代において，外国人と英語を通して，コミュニケーションを図っていこうとする前向きな態度が，生徒に備わってきたことを裏付けている。また，今後も続く英語学習に対する，生徒の期待感も感じることができる。

今後の展望として，本研究で得た成果をガイドブックおよび DVD という形で残し，これを静岡県内に幅広く伝えていきたいと考える。これにより，本研究の成果が，少しでも多くの県内中学校における英語授業の改善につながることを目指している。

番号	質問内容	平均値	肯定率
1	英語の朝学習に意欲的に取り組むことができた。	4.8	100%
2	インプットシートで質問の練習をしたことは，What am I?の活動を行う上で役立った。	4.8	97%
3	ペア活動は学習内容を理解するうえで役になった。	4.8	100%
4	グループ活動は，学習内容を理解するうえで役になった。	4.7	97%
5	What(Who) am I?の活動に意欲的に取り組むことができた。	4.8	100%
6	カードに描かれた絵や写真（アニキャラ，歴史人物，動物，有名人など）は興味深いものであった。	4.7	97%
7	朝学習の間，作業内容(指示)が分からず，困ることはなかった。	4.8	100%
8	i padやプロジェクターなどの機器を用いて，映像などを見たことで，授業内容への興味が深まった。	4.6	97%
9	アンケートに基づいてペアやグループを決めると，学びやすいと思う。	4.7	100%
10	英語の朝学習で感じた疑問を解決するために，自分で調べたり，人に聞いたりした。	4.2	83%
11	「ENGLISH NEWS」を読むことで，学ぶことがあった。	4.4	89%
12	通常の英語の授業で，朝の英語学習で行ったような内容をやってもらいたいと思う。	4.3	83%
13	英語の朝学習に取り組むことで，英語を話す力が，以前より伸びたと感じる。	4.5	86%
14	英語の朝学習に取り組むことで，英語を聞く力が，以前より伸びたと感じる。	4.6	89%
15	英語の朝学習に取り組むことで，英語を書く力が，以前より伸びたと感じる。	4.4	83%
16	英語の朝学習に取り組むことで，英語を読む力が，以前より伸びたと感じる。	4.4	83%
17	朝の英語学習によって「英語をもっと勉強したい」という気持ちが以前より増した。	4.3	83%
18	英語の朝学習を始める前に比べ，英語に対する自信がついた。	4.1	78%
19	朝の英語学習で英語を学べてよかった。	4.8	100%
20	英語を学ぶことは楽しいと思った。	4.6	92%
21	英語の勉強は大切だと思う。	4.9	100%
22	英語をもっと使えるようになりたい。	4.8	97%
23	英語が使えたら，自分の進路や将来の仕事に役立つと思う。	4.6	92%
24	英語を使って仕事をしてみたい。	3.6	47%